

お先に帰りました

羽生 紀佐子（羽生周史君の奥様）

お便りありがとうございます。昨年もいただいておきながら、返事も差し上げませず失礼いたしました。

実は羽生周史、昨年四月十六日にお浄土に帰っていきましました。そこで、本人に代わり恥ずかしながらお便りさせていただきます。

前回投稿させていただいたときは、癌を患って自宅療養中でした。あのときすでに最後の投稿になるかと思っていたことでしょうか。送っていただいた『八期通信』を嬉しそうに読んでいた光景が思い出されます。

その頃お墓も自分で建立していました。長崎港を望むお寺の墓地に鹿児島の方を向いて立っています。自分のお墓を見てみたいと言っていました。体力が弱っていたので、八十数段もある石段を上るのは無理と諦めていました。ところが、たまたま見舞いに来てくれた教え子さんにそのことを話すと「僕がおぶって行く！」と言って連れて行ってくれました。

その教え子さんは中学生の時、なかなかの元氣者だったようで、近隣の中学生と共に警察にお世話になったことがあったそうです。そのとき、担任の羽生先生が身元引き受けに来て「許さん」と言って、警官の前でその子を殴り、反対に警官から「先生が生徒を殴ったらいけん」と注意されたとのことでした。

お墓に着くと「僕は羽生先生にたくさん迷惑をかけたけん、少し恩返しができるよかったです」と言っていました。

二人は腰かけ台に並んで座り、しばし談笑していました。癌を患っていても苦しい様子をほとんど見せることもなく、家で最期を迎えました。同封の写真は、自治会長をしていたおりのものです。ソフトボール大会の始球式で、ボールを投げ終えたときの笑顔が、生前の夫を思ばせてくれるので、遺影にしました。

もう一枚の写真は、皆さんと一緒にの時のものです。楽しい学園祭だったことでしょうか。高校生時代の思い出話の中で、しばしば出てきたのが照国神社で剣舞を舞ったという話でした。

南鶴ヶ城を望めば砲煙あがる 痛哭涙を飲んで且彷徨
宗社亡びぬ我が事おわる 十有九土屠腹して斃る

という詩でした。たぶん詩吟だろうと思っていましたが、節も間の取り方もそのときどき好きにやっていますので、じつじつもの想像がつかないでいました。



最近歌手の氷川きよしさんがこの詩吟を歌っていました。「白虎隊」です。すばらしいものでした。薩摩藩の神社で会津藩の少年を慰む舞を奉納するなんて、すいぶん心が広い鹿児島風風なのでしようと感じ入っています。みなさんとの学校生活はとても楽しかったようで、残された私までありがたい気持ちにさせていただいています。

ともの家

羽生 周史（2組）

私は、学生時代に母に随分と迷惑をかけてきたので、就職するにあたり、一つの決意をした。母が、それからは給料の中から一部小遣いとして、母が亡くなるまで送金し続ける。家内と一緒に住むから、最初の千円から始めた。家内と一緒に住むから、そのことを話し、少しずつ額もアップしながら、十月になると送ったわけだから、母が自由に使える。郵便局に貯金して、随分と利息もつき、かなりの額に年々増えていった。

荒地在を耕し、母が生前、長崎に来る度に家内と二人で畑にたどり着く。石ころを拾い、雑草を取り、よりよくを「とも」の家「とも」といって、それで、このハウス（とも）からでもある。あれから十四年……

（二〇〇九年発行、八期新聞第十五号より）